※無断転載・複写はご遠慮ください。

第１５回科学隣接領域研究会　（2020.11.9）

科学と芸術　－その５－

テーマ：いのちと環境

「生命を主体とする哲学―南方熊楠とユクスキュル」

「粘菌・曼陀羅・潜在意識―南方熊楠のエコロジー」

公益財団法人
日本科学協会

※無断転載・複写はご遠慮ください。

第１５回科学隣接領域研究会について

日時：２０２０年１１月９日（月）１７：００～２０：００（Ｗｅｂ会議：Zoom 使用）

参加者（敬称略）

科学隣接領域研究会	リーダー	金子　務（大阪府立大学　名誉教授）
	サブリーダー	酒井　邦嘉（東京大学大学院総合文化研究科　教授）
	メンバー	安藤　礼二（多摩美術大学美術学部　教授）
	〃	岡本　拓司（東京大学大学院総合文化研究科　教授）
	〃	外山　紀久子（埼玉大学大学院人文社会科学研究科　教授）
	〃	梅干野　晁（東京工業大学　名誉教授/放送大学　客員教授）
	〃	前田　富士男（慶應義塾大学　名誉教授）
	〃	正木　晃（元慶應義塾大学文学部　非常勤講師）
特別講師		松居　竜五（龍谷大学国際学部国際文化学科　教授）
事務局		堀籠　美枝子

資　料

次第、研究会メンバーリスト、安藤先生資料、松居先生資料

内　容

・金子先生のご挨拶

・松居先生と安藤先生のご講義と質疑応答

第５回目となる「科学と芸術」研究会では、研究会メンバー安藤先生（多摩美術大学美術学部　教授）と、特別講師として松居竜五先生（龍谷大学国際学部国際文化学科　教授）が「南方熊楠」というテーマで「科学と芸術」を考えるきっかけとなるご講義をされました。

前半は、ご専門が比較文学・南方熊楠研究の松居先生が「生命を主体とする哲学―南方熊楠とユクスキュル」いう題でご講義されました。

熊楠とユクスキュルの「南方曼荼羅」と「環世界」、「やりあて」と「魔術的な道」を相対比しながら、熊楠の考えていた構想というものをお話しされました。松居先生の長年の研究から、熊楠自身は「芸術」ということを直接考えていなかったが、熊楠の宇宙や自然を楽しむという姿勢が芸術につながっていると考えられ、熊楠の「人間中心ではなく多様な自然を認識する」ということがこれからの一つの芸術の方向となり、私たちの芸術観、文化観、自然観が非常に狭いものの考え方の中で考えていることを示してくれるのではないかと考察されました。

後半は、ご専門が文芸評論、日本文化論の安藤先生が「粘菌・曼陀羅・潜在意識―南方熊楠のエコロジー」という題でご講義されました。

松居先生が熊楠研究から「科学と芸術」について考察されたことを深める形で、熊楠が考える「粘菌・曼荼羅・潜在意識」を他分野の学者や文献の内容を取り上げながらご説明されました。そして、現代の芸術というものは実は人間を中心に置かないで、心から生まれてくるイメージ、さらには自然そのものとしての心の構造というような形で、熊楠の探求と非常に相似形を描くのではないのかというご講義をされました。

（※1 松居先生の講義、※2 安藤先生の講義の概要がございますので、次頁以降をご覧ください。）

※無断転載・複写はご遠慮ください。

・研究会メンバーからのご意見・ご感想等

(※3 メンバーの先生方のご意見・ご感想を 19 頁以降で公開しております。)

・事務連絡

（1）今後の研究会について

・第 16 回 11/26（木）17：00～20：00

（2）研究会感想提出について

・第１５回研究会のご意見・感想を 400 文字程度（11/16（月）まで）。後日 Web サイト公開予定。

（3）セミナー・出版について

・今後「科学と芸術」セミナー、出版を企画予定

・セミナー開催時期について 2～3 月を検討

・コロナの影響を考えて Web 開催を検討

・出版は 2021 年 9 月目標

以上

※無断転載・複写はご遠慮ください。

※１「生命を主体とする哲学―南方熊楠とユクスキュル」 概要

龍谷大学国際学部国際文化学科 教授
松居 竜五

南方熊楠は、東洋と西洋の言語と文化に通じており、そうしたさまざまな文化の視点から生物の世界をとらえた博物学者と考えられてきた。そのため、従来の研究では、熊楠に「多文化主義」の思想を読み込もうとする方向が強く打ち出されてきた。しかし、熊楠のテクストを実際に分析すると、そこには人間よりも自然の側の多様性を強調する視線に行き当たることが多い。熊楠は、動物や昆虫、さらには植物にも主体としての立場を認めているのであり、それは近年の文化人類学で言うところの「多自然主義」に通じるものがある。こうした見取り図に立って、今回のレクチャーでは熊楠の同時代人であるヤーコプ・フォン・ユクスキュルの「環世界 Umwelt」に関する論との比較を試みたい。そのことにより、現代における過度な人間中心主義を克服するための示唆を得ることを試みる。

※２ 「粘菌・曼陀羅・潜在意識―南方熊楠のエコロジー」 概要

多摩美術大学美術学部 教授
安藤 礼二

南方熊楠は、エコロジーという言葉を用いて自然保護運動（神社合祀反対運動）を闘い抜いた。熊楠のエコロジーは、この言葉を創出したエルンスト・ヘッケルに由来すると推定されるが、そのなかに優生思想を孕み、結局はナチズムへと行き着いてしまったヘッケルのエコロジーとは重要な点で異なったものだった。進化（前進的な進化）ではなく退化（後進的な進化）、「幼形進化」（ネオテニー）による「発生」を探るエコロジーだった。そうした観点にもとづき熊楠は古生物学者コープ、神智学者ブラヴァツキー、心霊学者マイヤーズの著作を読み、そのことが粘菌、曼陀羅、潜在意識の発見につながっていった。熊楠の探究は現代芸術家たちの探究、抽象を見出したマレーヴィチやカンディンスキー（神智学の著作を読み込んでいた）、超現実（シュルレアル）を見出したアンドレ・ブルトン（心霊学の著作を読み込んでいた）に先行するとともに共振し、交響するものだった。

※無断転載・複写はご遠慮ください。

※3 研究会メンバーのご意見・感想など

〇金子務先生

神武東征は和歌山の海岸に上陸して神意の満ちた熊野の森林を背負って河内の野に降り立った意味が大きいと思うが、その熊野の地に生まれ育った熊楠のスケールの大きさが改めてお二人のお話しから了解されたと思う。

松居先生の熊楠とユクスキュルを対比した視点は新鮮で興味深かった。両者ともに人間中心主義からの脱却を図った研究者と思うが、熊楠の「やりあて」とユクスキュルの「魔術的な道」の対比のお話は、今後掘り下げていくとわれわれにとってもいろいろ見えてくる「魔術的な道」になると思った。熊楠曼荼羅と粘菌の生態との関係も興味深い。

安藤先生の多面的な論点も松居先生の発表と対応していて示唆深いものだった。神社合祀反対の運動が、熊楠の「密接錯雑な中に論理を見いだす」エコロジー思想と深く結びついている指摘も重要だと思う。ヘッケル思想の討論の中から、幼体と成体の対比、ネオテニーの視点が浮上していたが、グールド、ポルトマン、三木成夫らとの思想のつながりが見えてきて興味深かった。

〇酒井邦嘉先生

東洋思想と西洋科学が交錯する興味深いお話を、松居先生と安藤先生より伺うことができ、どうもありがとうございました。特に、自然の多様性や変化転生に意義を見出した南方熊楠の思想に興味を持ちました。人間と自然という対比は、人文科学と自然科学にまたがる大きな問題ですし、芸術はその狭間に位置していると言えるでしょう。科学では、データ分析から法則性を探る帰納的な研究が多いと思いますが、「自然の世界」という包括的（holistic）な観点から、俯瞰的に現象をとらえるという視点が大切だという思いを新たにしました。これは、芸術の目指す方向性とも合致するのではないでしょうか。そこで自然科学においても、演繹的な仮説によって諸現象を統合するような不断の努力が必要であり、芸術との交流を通して、そうしたトップダウンの見識を一層深められるものと期待できます。

〇岡本拓司先生

旧制の第一高等学校の資料を整理しており、ときおり南方熊楠の名前を見ることもあって、いずれは何かの際に取り上げて研究してみたいと思っていたところ、貴重なお話をお伺いでき、感謝申し上げます。熊楠が退学したあとですが、第一高等中学校（1886 年から 1894 年まではこの名称）で本科の二年となった漱石と子規が所属していた組は、木村駿吉という物理学者の講義を聞いており、その内容は、当時としては珍しい、科学史や科学の方法論に関する解説、科学概論のようなものでした。木村は、漱石・子規・熊楠にとっては教師ではありますが年齢は 1 歳ほどの違いであり、お話にもありました通り、熊楠と木村は後に友人となっています。木村はキリスト教徒でもあり、科学と信仰の両立を図るため、科学論についても詳細な考察を行っており、熊楠も何かこの点で木村と交流があったかもしれないと想像しました。

〇外山紀久子先生

破格の天才熊楠についてのおふたりのお話、そのあとの先生方のご発言、いずれも面白すぎてその晩はうなされていました。エクスキュルの環世界論との関連、多文化主義ならぬ多自然主義、無機物と有機物の連続／不連続、さらには世紀転換期に勃興した近代スピリチュアリズムとの距離感を巡る議論等々――人間中心のスケールを相対化するディープ・エコロジーや先住民文化の生命観を範とするダンスや環境芸術、プロティノス以来の宇宙論的シュンパテイアや宇宙感覚美学（アストロエステ）といった、自分の関心を考える上でも刺激と示唆に満ちていました。とりわけ、（霊感論の文脈でも中核にくる）主体の複数性・意識の多層性をどのように語ることができるかという問題圏には無茶苦茶心惹かれます。あと、多分違うのですが、偶々読み返していた『千のプラトー』（ドゥルーズ＋ガタリ）の議論がよくわかるようになった？気が一瞬しました。ありがとうございました！

※無断転載・複写はご遠慮ください。

○正木晃先生

インドで生まれた仏教は、初期型仏教から大乗仏教へと変容し、中国を経由することでさらに大きく変容し、日本に伝えられて劇的といっていいほどの変容を遂げた。したがって日本の伝統仏教は仏教の最終形態に位置づけられるとともに、もともと仏教にはなかった要素を多分に含む。たとえばマンダラ、仏性、如来蔵、非情成仏（自然成仏）、大楽思想などが、その典型例にあたる。ちなみにこれらの要素に対する明治以降の近代仏教界、とりわけ仏教研究者の評価は、必ずしも高くない。それどころか、むしろ「真の仏教ではない」と否定的な傾向が見られる。

そんな事情もあってか、欧米近代以降の科学的な知見をもちつつ、日本化した仏教のあり方に親近感を抱いた人物は、なかなか見当たらない。あえてあげれば、山形の山岳信仰を背景に、『月山』や『われ逝くもののごとく』などを書いた作家の森敦だろうか。森敦は華厳思想や真言密教に詳しく、しかも数学にも明るくて、理系的なセンスの持ち主だったようだ。だが、結局は日本化した仏教の世界に強く魅せられ、そのなかにみずからすすんで埋没していった観があって、その点は熊楠とはかなり異なっていた気がしてならない。以上がお二人のレクチャーを受ける前にわたしがもっていた熊楠観だが、今回、レクチャーを受けて、それがあながち的外れではなかったと確認できたのは、大きな収穫だった。

わたしの専門領域である空海と熊楠を比較するとき、こう言えるのではないだろうか。空海はこの世の複雑きわまりない様相をありのままに肯定しつつも、それが大日如来という究極の真理体現者によって統合されると信じていた。しかし熊楠は複雑な様相は複雑なままに受容し、無理に統合しようとはしなかった、あるいは統合をめざすとしても非常にゆるやかな統合をめざした印象がある。

「南方マンダラ」の、本来のマンダラに絶対不可欠なはずの明確な中心点も対称性もなく、むしろあちこちにポイント（結節点）があり、全体としては渦巻くエネルギーを思わせる描写は、そう考えると少しは理解できるのではないか。そしてその背景には、熊楠が生きた近代以降の世界が、1200 年前に空海が生きた世界とは、まったく次元の異なる複雑さに満ちていて、統合しようとしても、統合のすべが見出しがたいという認識が、熊楠にあったのかもしれない。

○梅干野晃先生

今回のお話し大変興味深く聴かせていただきました。ありがとうございました 。

放送大学の修士学生（当時田辺市職員）が田辺中心市街地の都市計画について修士論文を書いた関係で、2016 年、2017 年の２回田辺に行く機会がありました。市街地をはじめ、熊野古道や城跡と共に南方熊楠ゆかりの闘鶏神社や自宅、顕彰館を見てまわりました。田辺は、降水量が多く自然環境にも恵まれてうっそうとした森林が多いことと、古代から熊野詣での宿場として、そして城下町、港町として栄え、文化的にも豊かなところという印象を持ちました。観察・観察の場や自宅も近くにあり、周囲には文化人も多く、また支えてくれる人もいて、研究に専念できたのではないかと思いました。南方熊楠はこのような環境で、粘菌の研究に没頭した。今回のお話をお伺いして、改めて、生物学者、博物学者として学問への前向きな姿勢と、社会的にも精力的に活動された研究者だということがわかりました。彼は放送大学院修士課程を終了後、和歌山大学の博士課程に入学し、田辺市街地の研究を続けておりますので、機会があればもう一度訪れてみたいと思います。今回勉強させていただいたことを頭に入れて、南方曼陀羅の地や自浜の記念館に行くのを楽しみにしております。今回の有意義なお話し改めてお礼申し上げます。